

「中華副刊」に見る占領下の文学活動

山口 早苗

はじめに

日本占領下の上海では、予想されるよりはるかに、中国語文壇で活発で多様な言論・創作活動があった。それは戦時下・非常時に置かれた上海読書界の一定の知的渴望や消費主義に応えようとする意義をもつもので、単に時局に迎合した文学表現には収まらない、複雑な心理状況と屈折した民族意識を反映していた。本論文は、汪精衛政権の機関紙であった『中華日報』の文藝欄「中華副刊」の考察を通して、戦時期の上海文壇のうち汪精衛政権に与したとされた文化人の文学活動の一端を明らかにするものである。これにより、日本占領下上海の文壇をより立体的に描き出すことを目指す。

1. 本論文の背景

日本占領地における文学者の活動の実情は、従来の中国文学史研究の中では長らく正面から検討されることのなかったテーマである。もとより占領地に残留した知識人の行動に関心が持たれなかったわけではない。しかし、それも「抵抗」か「協力」か、という二極的な評価軸が主流であり、それ以上、個々の文学者の創作活動や思想営為に立ち入った検討が加えられることはなかった。こうした状況が変化したのは1990年代に入ってからである。香港出身のアメリカ人学者ポシュック・フーが「グレーゾーン」という分析概念を用いて、新たな研究の方向が提示された。フーは、日本占領下上海の文化人には、「忍従」「隠遁」という態度が存在したことを指摘している⁽¹⁾。

こうした状況を受けて、2000年以降、中国大陸や台湾でも日本占領下上海の文学状況に関する多くの研究成果が発表され、新たな視

野が切り開かれた。例えば、李相銀は主に雑誌『古今』『雑誌』を用いて占領下上海文壇を形成した一群の知識人の思想動向を分析し⁽²⁾、申東順は雑誌『万象』が当該時期の文学界で広範な作者を擁し、戦時下においても相対的に自由な言論空間を担保していたことを明らかにした⁽³⁾。また楊佳嫻は雑誌『詩領土』などを素材にして当時の文壇状況を整理した⁽⁴⁾。さらに涂曉華は雑誌『女聲』を研究対象にして当事者へのインタビューを行い、当時の編輯の実態に迫ろうと試みた⁽⁵⁾。このほか、修士論文でも、雑誌『風雨談』『文友』など当時の雑誌を対象とする研究が複数存在する⁽⁶⁾。

このように戦時下上海の文学状況を巡っては、雑誌を分析対象とした豊富な研究が積み重ねられつつあり、雑誌という媒体を介して上海の文壇状況はかなり明らかになっている。ただここで留意しなければならないことは、当時の上海では上に挙げたいくつかの雑誌のほかに、新聞の副刊（報道記事以外の文藝・生活などのテーマを掲げた特別欄）を舞台に実に多彩な文藝活動が展開されていた点である。遺憾ながら、雑誌研究の盛行に比して、新聞の副刊を用いた上海文壇の研究はほぼ皆無であった⁽⁷⁾。筆者は、活況を呈した当時の上海文壇の事情をより多面的に理解するには、新聞副刊紙上で展開された文藝活動を把握することは必須だと考える。

その作業の一つとして、本論文では『中華日報』の副刊「中華副刊」（1942～1945年）に注目する⁽⁸⁾。「中華副刊」を取り上げるのは、主に以下の2つの理由による。

一つは、新聞の副刊が文藝雑誌よりも広い販路と多くの読者を獲得していたことである。新聞の副刊の占める分量は紙面全体からみれば限られたスペースであったものの⁽⁹⁾、ほぼ毎日刊行される新聞は、月刊或いは季刊であった一般の文藝雑誌と比べて、人々の目に触れやすく、その影響力においても雑誌を上回りこそすれ、ほとんど遜色がなかったと考えられる。

1943年を例に挙げると、文藝雑誌の最多発行部数が2万部だったの対し⁽¹⁰⁾、「中華副刊」を掲載する『中華日報』の発行部数は5万9000部を超えていた⁽¹¹⁾。また「中華副刊」の内容を抜粋した『文壇

史料』(1944年)の初版・再版計6000部が早々に完売し、さら第四版まで出版された事実も、「中華副刊」が当時の人々に広く受け入れられたことを示している⁽¹²⁾。こうした事情を考えると、文学作品に手軽な娯楽を求める一般市民にとっては、新聞の副刊は最も身近に文藝と触れ合える場であったと言える。

第二に、「中華副刊」が汪政権の機関紙『中華日報』の副刊であった点である。従来「中華副刊」に集った知識人の多くは、汪政権に与した人物とされ、戦後は「漢奸」「親汪文人」という否定的な評価が先行し⁽¹³⁾、彼らが編輯・刊行した新聞や雑誌は、上述の雑誌『古今』や『文友』を除いては、ほとんど考察の対象とされてこなかった。

しかし、占領地の状況を把握する上で、汪政権の機関紙である『中華日報』の存在を無視することはできない。汪政権に近い文化人が如何なる形で上海文壇の一角を形作っていたのか。また、彼らが編輯・刊行した新聞(特に文藝欄などの副刊)の紙面は実際いかなるものだったのか。「中華副刊」を手がかりに、そこで展開された文藝活動を詳しく検討することで、当時の文壇をより立体的に把握することができると思う。

以下、まず『中華日報』本紙と「中華副刊」の概要を紹介し、続いて「中華副刊」の内容を5つの側面から検討してみたい。

2. 『中華日報』「中華副刊」の概要

(1) 『中華日報』について

『中華日報』は国民党汪精衛派の機関紙として、1932年4月上海で創刊された。日中戦争が激化したため、1937年11月に一度停刊したが、汪精衛が「和平運動」を開始したことに伴い、1939年7月に上海で復刊し、その後1945年8月21日まで刊行された。

これまでの「対日協力政権」に関わる研究では、『中華日報』は重要な資料であるにもかかわらず、断片的に引用されることはあったものの、包括的な研究は進められてこなかった。しかし近年では、汪政権研究の基本資料として注目されており、関智英が社評目録を

作成し、その概要を明らかにしているほか⁽¹⁴⁾、堀井弘一郎も同紙の日本批判の言説を分析するなど、『中華日報』そのものへの関心が日本の研究者の間では高まっている⁽¹⁵⁾。

(2) 「副刊」欄目の変遷

ここでは『中華日報』紙上に掲載された「副刊」の変遷過程を整理しておきたい。

1939年に復刊した後の『中華日報』は、購読者拡大を狙って10種を超える多様な副刊を増刊した⁽¹⁶⁾。このうち文藝作品を掲載したのは、「華風」「小採集」「文藝週刊」の3種である。当初存在した3つの副刊のうち前2種は、文学作品とともに時局論や政治的スローガンなども掲載した。これに対して、「文藝週刊」は散文・詩作・小説などに内容を限定した点で違いがみられた。

文藝関係の副刊は、その後刊種の増減・名称変更などを経て、1942年1月からは「華風」(週4回)、「文藝」(週2回)の2種となった。「文藝」はそれまでの「文藝週刊」の方針を受け継ぎ、詩・散文などの文学作品を掲載する副刊であった。しかしこの後、同年4月から「華風」「文藝」は姿を消し、「経済週報」「科学」「美育」を始めとする副刊7種体制へと変化した⁽¹⁷⁾。

1942年6月に「中華副刊」が創刊されると、上記の副刊7種のうち、「経済」「国際」「美育」「科学」の4種が、『中華日報』の姉妹誌である『中華週報』上に移動し、残りの「電影」「東聯週刊」「現代青年」は週刊となった。その中で、「中華副刊」のみ週5回掲載されたことから⁽¹⁸⁾、『中華日報』が「中華副刊」を重視していたことが窺える。創刊当初「中華副刊」は『中華日報』第6面の下半分のスペースを割いて掲載された⁽¹⁹⁾。

1943年3月26日には副刊「海風」(全348号)が創刊された⁽²⁰⁾。「海風」は、文藝作品だけでなく、300字前後の短い雑文・劇評を掲載した⁽²¹⁾。「中華副刊」は掲載内容や欄のレイアウト・スペースなどで「文藝週刊」や「文藝」と類似するのに比して⁽²²⁾、「海風」は副刊「華風」と近い特徴を持っていた。

1944年1月30日、「中華副刊」のスペースは半分に縮小し、掲載も週3日となり、他の4日間は「海風」（週3回）と「電影週刊」（日曜）が掲載された。こうした措置は専ら戦時の紙不足によるものと考えられ、2月3日には「戦時体制」を理由に、欄のスペースを縮小する旨の告示が出された⁽²³⁾。スペース削減の動きは、『中華日報』本紙も同様で、それまで6面あった紙面が1944年2月から4面に減少した。同年4月には紙面に「本報読者注意」が掲載され、新聞の予約購読が推奨された⁽²⁴⁾。

1944年7月には「海風」も姿を消し、副刊は「中華副刊」（週3回）のみとなった⁽²⁵⁾。日本の敗戦5カ月前の1945年3月には従来とは異なる縦長の形式が採用されたが、欄のスペースは維持され、以後8月の廃刊まで続いた。

(3) 「中華副刊」について

本論文で取り上げる「中華副刊」は同紙の文藝作品を掲載する「副刊」で、いわゆる文藝欄に相当する。1942年6月22日に創刊され、1945年8月21日に廃刊するまで、全692号が発行された。編輯者は、広東省出身の楊之華（1913～？）で、筆名に楊樺・何穆爾などを用いた⁽²⁶⁾。「中華日報社職工名單」によると、編集部のうち、総主筆・総編輯・編輯主任の下に9名いる主筆の1名であった⁽²⁷⁾。楊は少年時代に香港で学び、上海の大学に入学後、著名な作家である穆時英らと交友関係を結んだ。著作に、文藝評論集『文藝論叢』（太平書局、1944年）、散文集『浮浪絵』（知行出版社、1945年）がある。

1941年12月、太平洋戦争が勃発すると、日本軍により多くの新聞社・出版社が接収された。そのため、文筆に頼って生活していた文化人の中には、執筆活動が継続できず生活が困窮するものが続出した⁽²⁸⁾。こうした文化人の一部は、ある者は生活に迫られて、ある者は執筆の場を求めて中華日報社に入社し⁽²⁹⁾、文藝欄にも寄稿した。こうした状況から考えると、1939年7月に『中華日報』が復刊した際に文藝欄を担っていた人々と、1942年6月にスタートした「中華副刊」に関わった執筆者の間には、立場や思想の面で大きな違いが

あったと考えられる。例えば、楊之華は1942年以前から同社に加入しており、汪精衛の訪日に同行するなど⁽³⁰⁾、深く政権に関与していたが、1942年以降に関わるようになった陶亢徳はそれ以前に汪政権には全く言及していない。

さて、「中華副刊」は従来の近現代中国文学史の中で、ほとんど取り上げられることがなかった。言及されるとしても、以下の2点に限定されている。第一に、周作人研究においてである。日中戦争期に北京に残留し、華北政務委員会教育総署督辦にも就任した周作人が弟子の沈啓无を破門した際に、「破門声明」を掲載したのが「中華副刊」だった⁽³¹⁾。第二に、日中戦争期上海で活躍した文学者の活動を明らかにする研究資料としてである。とくに、当該時期に活発な文筆活動を展開した詩人路易士に関する資料として注目されたが⁽³²⁾、近年では作家黄裳の研究の他、日本占領下上海における魯迅の影響を論じた論考でも、主要な資料として活用されている⁽³³⁾。

しかし、「中華副刊」自体を対象とした研究はなく、またその評価も、「和平運動」を推進する刊行物という枠を出るものではなかった⁽³⁴⁾。中国近現代史の研究で学術的な関心が払われてこなかったのも、汪精衛派機関紙の文藝欄であるというその政治的性格に由来する。しかし、こうした評価・判断は表面的な理解に過ぎない。本論文では、特色ある掲載項目に注目することにより、「中華副刊」の性格とその文学的傾向を分析してみたい。

3. 「中華副刊」の内容

(1) 基本的性格

刊行の意義について、編者の楊之華は「副刊の受容性を高め、名称による内容の固定化を避けるため」としたが⁽³⁵⁾、こうした記述は『中華日報』が「中華副刊」の創刊まで、曜日ごとに異なる内容の副刊を掲載していたことと関連する。「中華副刊」は『中華日報』本紙の大幅な内容刷新の上で、副刊枠の設置が決定されたものであった。さらに楊之華は、「〔本刊は〕大目的を掲げるものではなく、「文藝や学術という範囲によって作者をしぼるものではない」ことを強調

したが⁽³⁶⁾、ここからは同刊が当初から文藝作品や学術論文など専門性の高い内容だけではなく、幅広く多様な読者を獲得できるようなジャンルを設けようとしていたことがわかる。言い換えれば、「中華副刊」は専門的な文藝欄の性格としてよりも、より一般大衆に向けた読み物を掲載する場として企図されていたのである。

具体的に見ると、「中華副刊」は小説・散文・詩などの文学作品のほか、多くの文藝評論を掲載した。投稿規定では「自由投稿」を基本としたが、以下で述べるように特定の執筆陣が掲載欄の大部分を占めた。「中華副刊」は約3年2カ月継続したが、1944年1月末を転機に掲載欄が半分に縮小し、週3回の掲載となったため、これ以降掲載作品数は減少していった。

創刊当初は投稿数が少なく、寄稿者は何若・柳雨生・魯賓ら12名だけだった⁽³⁷⁾。しかし、18号以降、周越然・予且（潘序祖）・陶亢徳・周黎庵・錢海一・鈞影（包天笑）らが原稿を寄せるようになり、さらに56号以降は内山完造・路易士・蕭劍青らも寄稿した⁽³⁸⁾。その後、投稿原稿が次第に増え、上海以外では、「遠くは北平・天津・開封・張家口、近くは南京・鎮江・蘇州・杭州・漢口・広州等の地域」から大量の手紙や原稿が送られてきたという。しかし、編者みずからが述べるように、同刊は厳格な基準で原稿を採用していたため、こうした投稿原稿の多くは掲載されなかった⁽³⁹⁾。

「中華副刊」上に掲載された原稿を分析すると、特徴的なのは、作品の掲載回数が多い作者が、魯賓・路易士・予且をはじめとしてほぼ中華日報社の社員であったことである〔表一、三を参照〕。ここから、「中華副刊」は基本的には中華日報社社員を中核とし、さらに外部の文化人から寄稿を受けることで成立していたと考えられる。投稿回数〔表一〕からは、同刊がおそらく編者の楊之華とともに、魯賓（路邁）・路易士（路逾）の兄弟を中心とした刊行物であった点も見てくる。こうした「中華副刊」の寄稿者は30歳前後の青年作家が主軸であった。「中華副刊」の中心にいた楊之華・路易士・魯賓らは、「中華副刊」の他にも、雑誌『詩領土』『文藝世紀』『文帖』等を出版した。このように文藝活動に意欲的な若い世代を代表するのが

「中華副刊」であった⁽⁴⁰⁾。

次に、5つの面から文藝欄としての「中華副刊」の特徴を指摘してみたい。

①魯賓・路易士の兄弟の活躍

「中華副刊」上で最も投稿頻度が高いのは、魯賓という人物である。これに続くのが、その兄の路易士である。路易士の事績については先行研究でも多く、理知的なモダニズムの詩風が高く評価されているので⁽⁴¹⁾、ここでは魯賓に限定して「中華副刊」上での動きを追っていきたい。魯賓は本名を路邁といい、詩人路易士の弟である。兄の回想録によれば、魯賓は先に中華日報社に入社しており、路易士は弟の誘いに応じる形で『中華日報』に関わるようになった⁽⁴²⁾。魯賓の名前は「中華副刊」創刊以前の副刊「文藝」上にみられるほか、『中華日報』の姉妹誌であった『中華月報』、汪政権に近い文化人が刊行していた『新東方雑誌』上でも確認できる。

では、魯賓は「中華副刊」上にどのような作品を投稿していたのだろうか。魯賓は主に散文・小説作品を掲載した際に使用した筆名で、詩作は田尾という異なる筆名を用いた。詩の作風は、兄路易士と似通っており、日本の堀口大学らのモダニズム詩に影響を受けた自由詩を得意とした。例えば、以下の「真夜中の思い」という詩は女性への恋慕の中で感じる憂鬱な心情を詠ったものだが、こうした作品は彼の作風を代表している。

あなたの日々に思いを巡らすとき、私は遼遠の歳月を追いかける
終わらない旅に永遠の湿った憂懐を注いでいる
あなたはすでに妙曼な装飾の下で、マルティナのような年月を送る
これが夢のような詐欺であっても、人々は皆これを真実だと願う
私の物語はあなたに対して、割れた杯と同じである
杯の血流が尽きれば、蒼白になり、
酔いの光沢をなくしてしまう⁽⁴³⁾

発表した詩作の多くは、恋愛や孤独を題材にしており、失恋の苦しみなどを叙情的に表現している。ただ、両者の相違点は兄の路易

士が詩作を中心に発表したのに対して、魯賓は小説・散文・詩と様々なジャンルの作品を生み出したことにある。

最も長い期間連載された「秋尾之夜」(全10回)は、やはり男女間の恋愛をモチーフとしており、夫と子のある女性に好意を寄せる男性の苦悩が描かれている。戦争や占領の影は全く感じられない。作品世界は、まるで上海文壇に「十二月八日」の断絶がなかったかのように、中国の都市文化を生きる男女を謳いあげているかに映る。

しかし、魯賓の散文作品には当時彼の感じていた無味乾燥で空虚な生活に対する不満を見て取ることができる。彼は自身の生活をこう顧みている⁽⁴⁴⁾。

いつも現在の生活圏を抜け出したいと考えている。しかし、いつも今のつまらない空虚なものに変わる何かを考え出すことができない。美味しいと思えるものを食べ、一人二人の女性と気楽に付き合い、差しさわりのない文章を書く。これが結局何になるうか。

こうした内省的表現には、戦争や占領といった現状を表す言葉は使用されていないものの、現実には不満を持ち、鬱屈した感情を抱く占領下の文化人の心情が投影されているのだろう。

魯賓や路易士の詩作が「中華副刊」上に大量に掲載されたことは上述した通りである。こうした詩に影響されてか、1944年前半期には、青年詩人が多くの詩を同刊に投稿し、詩作が多数掲載された⁽⁴⁵⁾。これは後に雑誌『詩領土』に集う路易士らの同人が、当初は「中華副刊」を主な発表媒体としたことと関係する。1943年8月には董純瑜・葉帆など、後の詩領土社の同人が次々と「中華副刊」上で新詩を発表し、同年9月には「詩専号」が刊行されるなど一時は活況を呈した。路易士らは1944年3月に同人誌『詩領土』を創刊するが、「中華副刊」での詩人たちの旺盛な活動が雑誌『詩領土』の活動に引き継がれたと言える⁽⁴⁶⁾。

「中華副刊」編集者であった楊之華は、1944年9月に路易士・南星らと雑誌『文藝世紀』を、翌年4月には自身で雑誌『文帖』を創刊した。『文藝世紀』や『文帖』の執筆陣も多くの「中華副刊」と重複

しており、この二誌も「中華副刊」と人的な繋がりを持った雑誌である。ただし、『文帖』は白話文の散文作品のみを掲載する雑誌で、文言文による文章も掲載した「中華副刊」と方向性が異なる⁽⁴⁷⁾。このように見ると、「中華副刊」は青年作家に対し発表の場を提供することで、戦時の特殊な環境に置かれた彼らの旺盛な創作活動を促進する貴重な媒体になったと評することができよう。

②通俗文学をめぐる論争

「中華副刊」上では1943年以降、文藝批評に関する文章が増加する。特に多いのは1943年6月下旬から7月末にかけてであり、ほぼ毎号こうした批評文が掲載された。そのほとんどが「文藝批評は作品を鑑賞すべきで、[作家を]罵倒するものではない」と主張するものであり、当時、文藝批評のあり方が争点となっていたことがわかる。では、こうした文章の背景にはどのような事情が存在したのだろうか。一つ考えておかねばならないのが、1943年4月に『雑誌』上で発生した「新文藝腔(=新文藝調)」問題である⁽⁴⁸⁾。この論争は、若い作家の文章の欧化・過度な修辭の使用を批判する李黙(李白英)の主張に始まった⁽⁴⁹⁾。李黙に続き、同誌の編輯者であった哲非(呉誠之)が同様に形式を過度に重んじ、内容が空虚なものになっているとして「新文藝調」を批判するが、この中で槍玉に挙げられたのが路易士の詩であった。哲非は文中で、「中華副刊」上に掲載された路易士の詩「対人類加以嘲笑(人類に嘲笑を与える)」を引用し、「この詩人の人生観には、つまらなさど可笑しさを感じる」と酷評した⁽⁵⁰⁾。これ以降も、『雑誌』上では「新文藝調」への批判が1944年12月まで一年以上にわたり掲載された。こうした批判に対して、路易士も沈黙していたわけではない。「中華副刊」上に掲載された反論からは彼の憤りが伝わってくる。彼は「詩の内容が一目瞭然であれば良い詩で、もし評論家が理解できなければそれを悪い詩だとするのは間違いだ」と言う。その上で、こうした「[偽]批評家は「左翼」批評家であって、プロレタリア意識を作品に求めている」ものだと反論した⁽⁵¹⁾。このように、路易士は『雑誌』上でたびたび批判の矢面に立たされたが、同誌は今日、袁殊を中心とする中国共産党の地下組織

が刊行に関与した雑誌であることが明らかにされている⁽⁵²⁾。路易士はこうした『雑誌』に集う「左翼」批評家から批判を浴び、自身も「中華副刊」上で批判への再反論を試みている。

路易士が中心となった論争はこれだけではなかった。1943年8月には、今度は路易士による通俗文学批判が「中華副刊」上に現れる。彼は、「文妖である礼拝六派（＝鴛鴦胡蝶派と称された大衆文藝作家）を掃蕩すべき」とする激しい批判を展開し、さらに翌月4日に開催された「上海市文化界座談会」の席上、「鴛鴦胡蝶派に容赦なく打撃を加えて掃蕩し、その姿を抹消し、二度と光の下に現れないようにすべきだ」と発言し、これが各新聞に取り上げられた⁽⁵³⁾。これに憤慨したのが、雑誌『万象』を主宰していた平襟垂である。平は『太平洋週報』上に「圍剿篇」と題する反撃の一文を掲載した⁽⁵⁴⁾。誌面には平を含め七編の反論が載せられた。平襟垂の言うところによれば、路易士の批判は五四新文学運動期の胡適や魯迅の批判を引き写したもので全く新鮮味に欠ける、鴛鴦胡蝶派に一方的に罪悪を押し付ける理由はない、として路易士の批判を真正面から斥けるものであった。また、反論の中には路易士への罵倒の語も含まれており、路易士らの責任を厳しく追及するものであった。平は以降も、複数の「小報（大衆向けの小型タブロイド紙）」上で繰り返し路易士批判を行い⁽⁵⁵⁾、対する路易士も「中華副刊」紙上で鴛鴦胡蝶派批判を続けた⁽⁵⁶⁾。このように路易士は『雑誌』に集う「左翼」批評家とともに、平襟垂を中心とする通俗文学作家たちとも対立することになったのである。

では、こうした論争に対して「中華副刊」はどのような態度をとったのだろうか。路易士が「中華副刊」の重要な寄稿者であった以上、彼を擁護する声が強かったことは当然である⁽⁵⁷⁾。例えば、葛宇安は路易士に対する批評は、「正当な創作方法〔という方面〕から批評の対象を把握せず、価値ある作品の靈魂である藝術的獨創性を無視する」もののだとして、こうした批評の方法自体を非難する⁽⁵⁸⁾。重要なのは、編者の楊之華が路易士を支持していたことである。そのほか、「中華副刊」に集った作家の中にも、路易士を代表とする青年作家の立場を支持する者が多かった。このことから、「中華副刊」は当時流

行の通俗小説（鴛鴦胡蝶派）には、「藝術的独創性」の観点から批判的な立場をとっていたことがわかる。さらに言えば、路易士ら「中華副刊」側の文化人は政治的立場においては『雑誌』と、知識人—大衆という軸では鴛鴦胡蝶派と対立関係にあった。

③回顧と懐旧

路易士・魯賓らが中心となった新詩の創作活動や文藝評論以外に、「中華副刊」にはどういった作品が掲載されていただろうか。編輯方針の変化から見ると、創刊から第56号に路易士の詩が登場するまで、「中華副刊」上に詩作は掲載されず、専ら散文作品が掲載された。同紙に掲載された散文作品は回憶録が多く、「憶黃廬隱（黃廬隱を憶う）」「記劉唘鷗（劉唘鷗について記す）」など「憶～」「記～」と題する文章が頻出する。これは、日本占領下の上海では多くみられた散文の形式であり、内容は概して懐古的なものであった。さらに、この時期多く掲載された周越然の散文には「版本漫談」（全3回）など古籍に関する内容がみられる。これは雑誌『古今』の傾向とも重なる⁽⁵⁹⁾。創作に様々な制約がともなう戦時下の非常時において、古典への志向や懐古的作風の作品が増えるというのは、興味深い問題である。同時代の北平（北京）の論壇状況にも同一の傾向を見出すことができる⁽⁶⁰⁾。

さらに興味深いのは、五四新文学運動以降の中国文学の思潮を振り返る動きが盛んにみられることである。例えば、編者楊之華は五四以降の社団と呼ばれる文藝団体を取り上げ、「未名社」「現代社」など各団体の活動を概括するいくつかの文章を寄せている。楊のこれらの文章は前述の『文壇史料』にまとめられたが、この試みは日本文壇から影響を受けたものだったらしい。

過去の文壇状況を回顧したのは楊だけではなかった。例えば、陶晶孫は自身が参加した創造社での活動に触れ、各メンバーの社内での役割を振り返る一文を発表している（「記『創造社』」全3回）。また、1920年代に出された雑誌『大衆文藝』での活動を顧みるに際して、この活動が自身の転換点になったとの回想をしている（「憶『大衆文藝』」全3回）。さらに、陶と同じく創造社成立当初のメンバーで

あった張資平は、創造社の成立から1926年の北伐開始までの活動を詳細に振り返り、自身の文学的歩みを長期連載の形で追想している（「曙新期の創造社」全28回・「前期創造社」全24回・「中期創造社」全18回）。このように、五四新文学運動以降の自らの文学活動を顧みる文章が多く掲載されるとともに、文壇状況の整理が進められたのも「中華副刊」の特徴であった。

④特集号

「中華副刊」は17回にわたって多様な特集号（専門号／特輯号）を組んだ。このうち、最初の特集号は「紀念魯迅先生特輯（魯迅逝去六周年）」であった。以降、同刊は毎年魯迅の命日に特集を組み、生前魯迅と関係した内山完造などの人々に執筆を依頼し、魯迅との思い出や印象記を載せた。この特集は当時の日本人居留民の間でも話題になったことが、上海の日本語新聞『大陸新報』の記事から窺える⁽⁶¹⁾。

このほか、特集号で目を引くのは日本文学を含む外国文学の積極的な紹介である。「日本現代文学専号」は5回にわたって連載され、1935年発表の萩原朔太郎の詩論『純正詩論』に収録された「西洋の詩と東洋の詩」や、1941年に『改造』に連載された横光利一の小説「恢復期」のほか、1941年に発表された吉田精一『近代日本浪漫主義研究』の一部が訳載され、日本文学への強い関心が示された。こうした作品は、日本国内での出版時期と訳載された時期にほとんど隔たりがないことから、上海の文化人たちが同時代の日本文学の動向を注視していたことがわかる。

また、同時期に2度にわたる「翻訳専号」で欧米の作品が訳載されたことも注目に値する。ブルガリアの作家イヴァン・ミンチョフ・ヴァゾフの小説など東欧作家の作品がエスペラントから中国語に翻訳されたほか、路易士らは堀口大学がフランスの作家ブレイズ・サンドラールや、ジャン・コクトーの詩を日本語訳したものを中国語へ重訳した。これ以外にも、イタリアの作家デ・アミーチスや、アメリカの作家ラングストン・ヒューズの作品のほか、さらにドイツやイギリスの作家の作品も訳載しており、様々な国の作品が並んでいる。中でも、紫園が取り上げたアダム・ミツキェヴィチは、魯迅

が「魔羅詩力説」（1908年）の中で言及した作家である。魯迅の命日に合わせた先の特集号といい、「中華副刊」同人が受けた魯迅の薰陶や影響の深さを読み取ることができよう。

翻訳作品について、編者は特に基準を設けて作品を選定しているわけではないと述べているが⁽⁶²⁾、結果的には上に見たように多様性に富んだ内容になっている。また、編者は英語作品以外はほとんどが日本語からの重訳であると断っており⁽⁶³⁾、ここからも占領下上海で活動した中国文化人たちが同時代の日本文壇から大きな影響を受けていたことがわかる。

このほか、「一年来文化界回顧特輯」では周越然・楊之華・予且（潘序祖）らが、雑誌・短篇小説・出版界など各方面から1942年の上海の文学状況を総括している。「作家日記特輯」には華北の文化人も原稿を寄せており、周作人は自身が「国府遷都三周年慶祝会」に参加した1943年3月30日の、沈啓无は4月7日に南京の教育部を訪問した際の日記をそれぞれ載せている。「作家書簡特輯」にも周作人の名前が見え、1934年の劉半農追悼式の際の書簡が掲載された。劉半農は魯迅・周作人兄弟の親しい友人で、方言調査中に得た病が原因で急逝した詩人・学者である。周作人と「中華副刊」の関係は創刊の4カ月後には始まったことが確認できる。両者の関係は人的つながりもあって概して良好だったようで、1942年11月には周作人が柳雨生に宛てた詩が掲載されている⁽⁶⁴⁾。

1943年8月1日に上海租界の返還が発表されると、『中華日報』紙面では汪精衛・周化人ら政府要人の祝辞を立て続けに掲載した。政権の監督下にある中華日報社側では、歩調を合わせて「建設新上海特輯」を組み、この歴史的イベントを大きく宣伝した。これにともない「中華副刊」上でも「建設新上海」の特集が生まれ、合計22名の政府・財界関係者、文化人が租界返還後の上海の展望を語っている。ここでは特に文学者の発言に注目してみたい。

汪政権で立法委員を務めた作家龍榆生は、以下のような「上海建設」の方策を示している。それは、上海を商業区・工業区・国際政治区・住宅区・文化区に分け、文化区には高等教育機関や各種の文

化研究機関を一律に集中させ、さらに商業区や政治区とは距離をおいた上で、文化や教育にふさわしい環境を作り上げるというものである⁽⁶⁵⁾。また周越然や予且は、「上海建設」の一環として教育の改善を取り上げたが、これとは逆に推進すべき政治運動について触れることはなかった。文学者のうち、最も激烈な文句で「新上海建設」への意気込みを語ったのは路易士である。とはいえ、結局は「上海のすべての文化人が切実にやれることをやり、誠実に団結し、行動を一致する」ことが「大上海」の建設につながると主張したに過ぎず、具体的な方策については政治的に何かを語ったわけではない。総じて言えば、特集号に寄稿した文化人たちの言説からは、「新上海建設」という政府の大々的なスローガンに対する一種の消極的あるいは退嬰的な姿勢すら感じられる。

⑤戦争と平和

以下では上述した「建設新上海特輯」のほか、「中華副刊」上に現れたいくつかの政治的言説に注目してみたい。まず、魯賓は恋愛に関する作品のほか、2篇だけ戦争詩というべき作品を遺している。日本海軍航空隊の功績を評価し、「寧ろ玉砕、瓦全する勿かれ、アングロサクソンの喪鐘が響く！」と結ぶ詩とともに、「敵」である「白人」に対し「我々は絶対に戦勝しなければならない」とする詩である⁽⁶⁶⁾。ただし、こうした詩を書いた彼の意図は不明である。戦争詩はわずか2篇であり、ほかの多くの作品では戦争や政治的スローガンに全く触れるところがない。この2篇は「中華副刊」300号記念号のための作品で、こうした戦争詩は魯賓にとって例外的な作品であった。また、魯賓と交友があり、汪政権宣伝部顧問として南京に滞在していた草野心平は、やはり政治的な含みを持つ詩を「中華副刊」上に発表しており、汪政権還都3周年の際には、「アジアの偉大な春がやってきた」で始まる還都祝福の詩を発表した⁽⁶⁷⁾。

しかし、注意しなければならないのは、「中華副刊」上にこうした政治性の強い作品が掲載されることはまれであり、紙面のほとんどが「和平」や「三民主義」、「大アジア主義」など政権が掲げ鼓吹するスローガンと無縁なものであったことである。先行研究では「中

華副刊」上では「和平文学」というスローガンが提唱されたものとする⁽⁶⁸⁾。「中華副刊」を精査する限り、こうした内容の記事は確認できない。また、「中華副刊」の前身である「文藝」副刊上では、「和平文学」を呼びかける文章が3篇掲載されたが⁽⁶⁹⁾、執筆者である黎嵐は「中華副刊」の時期になると、自身の香港時代の回想録を載せるのみで、政治的な発言は一切行っていない。汪精衛政権の機関紙に設けられた文藝欄である以上、時局に関わる態度表明を迫られることは避け難かっただろうが、見方を変えれば、政治的言説とは距離を取ろうとする「中華副刊」編者の意図が見え隠れしているとも言える。こうした編輯の方針は、東京で2度、南京で1度開催された大東亜文学者大会の参加記にも共通し、政府肝煎の文化イベントに対する冷淡とも無関心とも言うべき姿勢が読み取れる。

この後、上海では1945年8月11日に日本の敗戦が報じられたが、『中華日報』は21日まで刊行を続け、その間「中華副刊」も存続した。8月11日以降の「中華副刊」の紙面は、8年間の日本軍による占領から解放された喜びに包まれている。一例を挙げれば、「曙光」「我們歡呼」と題される羅挺威の文章は解放の喜びに溢れており、「自由と平等のために大声で歌い、独立解放のために大声で叫ぶのは今だ」として読者に呼びかけるとともに、蔣介石への忠誠を誓っている⁽⁷⁰⁾。

おわりに

以上の考察から、「中華副刊」に現れた占領下上海の文学活動に関して、以下の2点を明らかにした。

第一に、「中華副刊」は中華日報社社員やその関係者を主体とする刊行物で、鴛鴦胡蝶派と呼ばれた大衆文学作家や商業文藝誌『雑誌』に集った文化人とは対立関係にあったことである。「中華副刊」の性格は、同様に汪精衛政権に近い文化人が刊行した雑誌『古今』と比較することで明確になる。紙面構成の面で、『古今』は人物や文壇の回憶記を多く掲載した点で「中華副刊」と共通する。しかし、『古今』に掲載された文章は明清時代の有職故実（歴史掌故）などが中心

で、その理解にはより深い文学的素養を要するのに対して、「中華副刊」のそれは、比較的平易な文章で書かれ、一般読者にも理解しやすいものであった。「中華副刊」はより広い層に向けて設けられた新聞の文藝欄であったと言える。また、『古今』の主要な寄稿者は朱樸・徐一士・謝興堯らの既成作家で⁽⁷¹⁾、そのほとんどが1900年前後の生まれであり、当時40歳前後の世代だった。これに対し、「中華副刊」は、『古今』と同様に汪政権と近い位置にあった文化人が中心になっていたものの、年齢・世代で言えば、意気に燃え革新志向を持つ若い作家が中心となっていた。

第二に、「中華副刊」は従来考えられてきたような「和平文学」を提唱する刊行物ではなく、政治的言説が紙面を飾ることはまれであったということである。大東亜文学者大会に対する同紙の態度は上述したとおりだが、同じことは「東亜文藝復興」運動の例からも説明できる。1941年から『中華日報』紙面では、「東亜文藝復興」運動を提唱し、「〔中国は〕東亜共栄圏の一環として文藝復興を遂げなければならない」とする論説を一面に掲載するとともに、運動に関連する記事を頻繁に掲載した⁽⁷²⁾。しかし、こうした動きが「中華副刊」に反映されることは全くと言っていいほどなかった。こうした政治スローガンとの距離の取り方は、路易士の「〔中華副刊は〕文藝を尊重し、作家が自由に創作し、政治による文藝への関与に反対した」という後の証言と基本的には一致していたわけである⁽⁷³⁾。

もちろん、今回の検討によって、「中華副刊」の内容が全て明らかになったわけではない。中華日報社内での「中華副刊」への位置づけや、『中華日報』紙面との関係も分析すべき重要課題として残されている。今後はそうした点にも考慮しながら、「中華副刊」の全体像、さらには占領下上海における中国語メディアの位置づけを探求していくべきであろう。今後の課題としたい。

註

- (1) Poshek Fu, *Passivity, resistance, and collaboration: intellectual choices in occupied Shanghai, 1937-1945*, Stanford University Press, 1993. 中国語版は傅

- 葆石著・張霖訳『灰色上海，1937-1945：中国文人的隠退，反抗与合作』（生活・読書・新知三聯書店，2012年）。
- (2) 李相銀『上海淪陥時期文学期刊研究』上海三聯書店，2009年。
- (3) 申東順『『万象』の雑誌形態（上）（下）』『海南師範学院学報（社会科学版）』2006年1・2号。
- (4) 楊佳嫻『懸崖上的花園：太平洋戦争時期上海文学場域（1942-1945）』国立台湾大学出版中心，2013年。
- (5) 涂曉華『上海淪陥時期『女聲』雑誌研究』中国伝媒大学出版社，2014年。
- (6) 唐倩「対上海淪陥区一份総合性文学雑誌の歴史考察——『風雨談』研究」華東師範大学修士論文，2008年。魏霄「『文友』（1943-1945）研究」華東師範大学修士論文，2008年。
- (7) 同時期上海で発行されていた日本語新聞『大陸新報』の文藝欄の研究は進んでおり，大きな成果を上げている（大橋毅彦ら編著『新聞で見る戦時上海の文化総覧：「大陸新報」文芸文化記事細目』（全3巻）ゆまに書房，2012年など）。
- (8) 本稿では，明治大学図書館所蔵のマイクロフィルム版（中華全国図書館文献縮微中心作成，1932年）を使用した。
- (9) 先行研究では，文藝雑誌の種類が新聞の文藝欄の種類を凌いでいた点，新聞上で文藝欄に割かれた紙幅も限定的であったことの2点から文藝欄を重視しないとする（「滬寧報紙文藝副刊」，錢理群ら編『中国淪陥区文学大系・史料卷』広西教育出版社，2000年，714頁）。
- (10) 1943年の統計によると，売上部数最大の文藝雑誌は『万象』（月刊）で，2万部であった（「全国雑誌分区総調査」『出版月報』5・6号，1943年12月）。
- (11) ちなみに上海での新聞販売部数は，1943年は『新申報』10万，『新聞報』6万7000（「全国報紙分区総調査」『出版月報』3・4号，1943年11月），1944年は『新申報』8万，『新聞報』6万であった（楊寿清「兩年来的上海出版界」『兩年』第1号，1944年10月）。
- (12) 『文壇史料』は，「中華副刊叢書」の第一弾として1944年1月に刊行され，同年3月に再版，その後四版まで出版され，戦後も大連等で影印版が

- 出された。『文壇史料』には一部『中華日報』『文藝』の作品も収録された。
- (13) 黄万華ら『中国抗戦時期淪陷区文学史』福建教育出版社, 1995年, 490頁。
 - (14) 関智英「『中華日報』社評目録(1)～(3)」『明大アジア史論集』第20～22号, 2016年3月・2017年3月・2018年3月。
 - (15) 堀井弘一郎「『親日』派華字紙『中華日報』の日本批判, 堀井弘一郎ら編『戦時上海グレーゾーン: 溶解する「抵抗」と「協力』』2017年。
 - (16) 関智英前掲「『中華日報』社評目録(1)」。
 - (17) 「経済週報」「国際」「美育」「科学」「電影」「東聯週刊」「現代青年」の7種。「東聯週刊」は, 東亜聯盟中国総会上海分会宣伝科の刊行物(1942年5月5日創刊)で, 汪精衛政権のうち東亜聯盟運動関係者が刊行した。
 - (18) 当初は日曜から木曜に「中華副刊」, 金曜に「電影」, 土曜に「東聯週刊」が掲載され, 「現代青年」は不定期掲載だった。
 - (19) 1942年9月からは紙面下部に広告が掲載されたため, 「中華副刊」欄は紙面上部に移動した。
 - (20) この後「海風」は1944年7月に終刊した。
 - (21) 編者「徵稿宣言」(「海風」第1号, 『中華日報』1943年3月26日, 第3面)。
 - (22) 「翻訳専号」(「文藝」第18・19号, 『中華日報』1942年3月4・5日, 第6面)。
 - (23) 編者「致読者」(『中華日報』1944年2月3日, 第3面)。
 - (24) 「本報読者注意」(『中華日報』1944年4月1日, 第3面)。おそらくこの動きは, 次の事情が関係しよう。「〔1944年〕春に新聞の定価が低廉であったため, 新聞販売商は往々にして実際の販売量を越えた数量〔の新聞〕を購入し, 〔残りの〕新聞を保存し〔後にやみ値でこれを売ることで〕, わずかではあったが利益を得ていた。そのため, 各報は続々と読者に登録をさせることで, 販売数を制限しようとした」(楊寿清前掲「兩年来的上海出版界」)。
 - (25) 「啓事」(「中華副刊」第455号, 『中華日報』1944年7月1日, 第3面)。
 - (26) 「桂華編輯」司馬文偵『文化漢奸罪惡史』上海曙光出版社, 1945年, 38頁。

- (27) 中華日報社は、林柏生ら広州の嶺南大学卒業生が社員の多数を占めており、とりわけ広東出身者が多かった（「中華日報社職工名単」上海市檔案館、檔案番号Q431-1-76-1）。
- (28) 傅葆石前掲書、148頁。
- (29) たとえば陶亢徳は1942年半ばに中華日報社に加入した（拙稿「陶亢徳と中華日報社：編輯者の側面に注目して」『中国：社会と文化』32号、2017年7月）。
- (30) 楊之華『主席訪日随行記』中央電訊社、1941年。
- (30) 周作人「破門声明」（「中華副刊」第404号、『中華日報』1944年3月2日、第3面）。
- (32) 杉野元子「路易士と日本：戦時上海における路易士の文学活動をめぐって」（『比較文学』第52巻、2009年3月）、鈴木将久「戦時下において詩はどこにあるのか：路易士の詩的活動」（『上海モダニズム』第5章、中国文庫、2012年）など。
- (33) 李相銀「『中華副刊』上黄裳の三篇佚文」『淮陰師範学院学报（哲学社会科学版）』2013年4期、同「魯迅在上海淪陷時期文学中的投影」『中国現代文学研究叢刊』2013年8期。
- (34) 前掲「滬寧報紙文藝副刊」。
- (35) 編者「創刊報告」（「中華副刊」第1号、『中華日報』1942年6月22日、第6面）。
- (36) 編者「百期回顧」（「中華副刊」第100号、『中華日報』1942年11月25日、第6面）。
- (37) 「識小・何若・姜仇・柳雨生・黎嵐・魯賓・鮑七・章実ら十二名」（編者「百期回顧」）。
- (38) 「内山完造・路易士・蕭劍青・黄覚寺・姚克・楊静菴・尸一・楊鴻烈・梅阡・楊光政ら、中国文化界の知名人」が寄稿したとする（編者「百期回顧」）。
- (39) 編者「致読者」。
- (40) 興味深いのは、楊之華が創刊した『文帖』『創刊詞』では散文の発展の可能性を妨げるものとして懐古・清談（風流・高尚な話題）を挙げ、それらを否定的に論じていることである。おそらくこれは『古今』派にあえて

- 異を唱え、そうすることで散文の別の可能性や方向性を目指すことを宣言したものであろう。
- (41) 杉野元子前掲論文、鈴木将久前掲書。
 - (42) 紀弦（路易士）『紀弦回憶録・第一部二分明月下』聯合文学出版社、2001年、121頁。
 - (43) 田尾「午夜思」（「中華副刊」第106号、『中華日報』1942年12月6日、第6面）。
 - (44) 魯賓「煩瑣」（「中華副刊」第390号、『中華日報』1944年2月19日、第3面）。
 - (45) 編者「検討と希望」（「中華副刊」第450号、『中華日報』1944年6月23日、第3面）。
 - (46) 編者によると、1943年半ばには投稿作品の約3分の1が詩作であったという（編者「編後記」（「中華副刊」第301号、『中華日報』1943年9月15日、第6面）。『詩領土』は詩人路易士らによる同人誌で、1944年3月に創刊後、12月まで全5号が刊行された。
 - (47) 編者「創刊詞」『文帖』1巻1号、1945年4月1日。
 - (48) この議論については李相銀前掲書、張梅「上海淪陷区「新文藝腔」討論的史料鉤沉」（『新文学史料』2010年4期）に詳しい。
 - (49) 李黙「論「新文藝」筆法」『雜誌』10巻5号、1943年2月10日。
 - (50) 哲非「新文藝内容問題」『雜誌』10巻6号、1932年3月10日。
 - (51) 路易士「關於『批評』」（「中華副刊」第244号、『中華日報』1943年6月27日、第6面）。
 - (52) 「華中淪陷区文藝期刊鉤沉」錢理群ら前掲書、673頁。
 - (53) 路易士は新聞報道で自身の発言が曲解されているとして、弁解を行った（「希望与責任」（「中華副刊」第308号、『中華日報』1943年9月25日、第6面））。
 - (54) 平襟亜は『太平洋週報』で路易士批判を展開する以前に、『海報』紙面上でも路易士へ反論していた。
 - (55) ここでは、大衆文藝誌や総合誌からの批判を取り上げたが、鈴木将久前掲書（205頁）によれば、路易士はほかにも『社会日報』などの「小報」上でも通俗文学作家から執拗に攻撃されたという。

- (56) 路易士「漫罵之抹殺（上）（下）」（「中華副刊」第328・329号、『中華日報』1943年10月28・30日，第6面），「我的忿怒」（「中華副刊」第396号，『中華日報』1944年3月4日，第3面）など。
- (57) 例えば，烟帆「欣賞及批評」（「中華副刊」第260号，『中華日報』1943年7月15日，第6面），里仁「『真正的文化人』」（「中華副刊」第263号，『中華日報』1943年7月20日，第6面），何倪「作家与批評家」（「中華副刊」第269号，『中華日報』1943年7月28日，第6面）など。
- (58) 葛宇安「我們所期待的文藝批評（一）～（四）」（「中華副刊」第292・294～296号，『中華日報』1943年9月2・5～9日，第6面）。
- (59) 「『古今』では」書籍購入の苦楽，書籍の源流，書店の内幕」など書籍の話題が多く掲載された（「学者言志散文的創作」，黄万華ら前掲書，594頁）。
- (60) 袁一丹「隱微修辭：北平淪陷時期文人学者的表達策略」『中国現代文学研究叢刊』2014年1期を参照。
- (61) 上海の日本語新聞『大陸新報』には同特輯に関する記事が掲載されている（「魯迅逝いて六年：租界文化人・思ひ出の筆をとる」『大陸新報』1942年10月20日，第4面）。
- (62) 楊之華「導言」（「中華副刊」第347号，『中華日報』1943年11月25日，第6面）。
- (63) 編者は言及していないが，英語作品のほか，エスペラントで記された作品は，原文から直接中国語に翻訳された。
- (64) 知堂（周作人）「賦得七夕」（「中華副刊」第101号，『中華日報』1942年11月25日，第6面）。
- (65) 龍沐勳「對於建設新上海的希望」『中華日報』1943年8月1日，第6面。
- (66) 魯賓「海洋戰士頌」（「中華副刊」第300号，『中華日報』1943年9月14日，第6面），「我們要戰勝」（「中華副刊」第305号，『中華日報』1943年9月21日，第6面）。
- (67) 草野心平「還都三周年」（「中華副刊」第187号）『中華日報』1943年4月7日，第6面。なお，本作品は『草野心平全集』（筑摩書房，1978～1984年）には収録されていない。他に交友のあった日本文化人として当時朝日

- 新聞上海支局に勤務していた林俊夫がいる。魯賓は、林の招きで食事会に行き、これを記念する詩を作っている（田尾「『白馬酒店』之夜」（『中華副刊』第175号、『中華日報』1943年3月22日、第6面））。
- (68) 前掲「滬寧報紙文藝副刊」。
- (69) 黎嵐「關於和平文藝諸問題」（『文藝』第11号、『中華日報』1942年1月31日、第6面）など。
- (70) 羅挺威「曙光」（『中華副刊』第690号、『中華日報』1945年8月18日、第2面）、「我們歡呼」（『中華副刊』第691号、『中華日報』1945年8月19日、第2面）。
- (71) 「『古今』主要作者發文統計」，李相銀前掲書，84頁。
- (72) 司馬雷「關於文藝復興」（『中華日報』1943年10月24日、第1面）など。
- (73) 紀弦前掲書121頁。

（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

附録

「中華副刊」に見ると占領下の文学活動
山口

表一、「中華副刊」への作者ごと執筆回数（のべ）

執筆回数	作者	備考
219回	魯賓	=路邁（田尾98回，魯賓117回，蔓斯4回）
197回	路易士	=路逾
133回	予且	=潘序祖
123回	何若	=梁式（何若116回，戸一7回）
120回	周越然	
93回	蕭劍青	
87回	張資平	
77回	楊之華	（楊之華28回，何穆爾44回，楊樺5回）
71回	朽木	
70回	柳雨生	（柳雨生63回，柳存仁7回）
59回	楊靜盒	
51回	錢海一	
48回	蕭雯	
42回	陳烟帆	
31回	余拯	
30回	真原	=雷振源
28回	迅俟	
26回	伍僑子	
20回	鈞影	=包天笑
〃	陶亢德	
〃	沈志堅	

*筆者作成。（執筆回数は）記事ごとにカウント。

表二、特集号（特輯号・専門号）一覧

1942年10月19～23日	【第71～75期】	「紀念魯迅先生特輯」
1942年11月19～20日	【第95～96期】	「大東亜文学者特輯」
1942年11月25日	【第100期】	（「百期紀念号」）
1943年1月7～14日	【第128～132期】	「一年來文化界回顧特輯」
1943年4月26～27日	【第200～201期】	「作家日記特輯」
1943年6月22～24日	【第241～243期】	「作家書簡特輯」
1943年8月3～4日	【第272～273期】	（「建設新上海特輯」）
1943年9月14～15日	【第300～301期】	「詩專号」
1943年10月19～20日	【第321～322期】	（「魯迅先生逝去七周年紀念特輯」）
1943年11月2～7日	【第331～335期】	「日本現代文学專号」

二〇五

1943年11月25日 ～12月2日	【第347～351期】	「翻訳専号」
1944年1月11～16日	【第371～375期】	「翻訳専号」
1944年6月20日	【第448期】	「詩専号」
1944年6月22日	【第449期】	「創刊二週記念号」
1944年6月29～30日	【第453～454期】	（「穆時英四年忌」）
1944年10月19～26日	【第501～504期】	「魯迅先生逝去八周年紀念特輯」
1944年12月7日	【第519期】	（「文化座談記録」）

*筆者作成。（ ）内は特輯・専門号であるが名称が特に示されない場合。

表三、主要執筆者の略歴

路邁 (魯賓)	河北清苑人。路易士の弟。筆名に路曼士・魯賓・蔓斯・田尾・魚貝など。おそらく1940年頃に中華日報社に入社し、ニュースなどの編輯を担当した。
路逾 (路易士)	(1913-2013) 河北清苑人。筆名に路易士・紀弦。1936年に日本留学、37年に上海を離れ、香港に定住。39年には香港『国民日報』副刊を編輯。42年に上海に戻り、一時汪政権行政院科長に就任し、中華日報社で編纂を務めた。戦後は48年に台湾に、さらに67年にはアメリカへ移住した。
潘序祖 (予且)	(1902-1989) 安徽涇県人。筆名に水繞華堤館主・予且・潘など。1930年代は上海中華書局で編輯に携わり、また光華大学附属光華中学で教員を務めた。37年にいったん上海を離れるが、39年に戻る。光華中学で教員を務める傍ら、中華日報社で編纂の職に就いた。43年に『予且短篇小説集』で第二回大東亜文学賞を受賞。
周越然	(1885-1962) 浙江呉興人。筆名に走火・月船。清末の秀才で南社社員。1920年代に上海商務印書館函授学社副社長、英文科科长を務め、『英語模範読本』を出版した。42年頃から中華日報社で資料室主任を務めた。蔵書家として知られ、『書・書・書』(1944年)、『版本与書籍』(1945年)などを出版した。戦後は呉淞水産専科学校で教職についた。
梁式 (何若)	広東台山人。1930年代に広州『国民新聞』の副刊「新時代」を編輯。後に、中華日報社総主筆を担当。
蕭劍青	東南アジアの華僑、原籍は広東。画家。1930年代は上海世界書局に務めた。44年『青年画報』を創刊し、自ら社長を務めた。
張資平	(1893-1959) 広東梅県人。本名、張星儀。筆名に張資平・張声・秉声等。1912年、日本留学。19年、東京帝国大学理学部入学。20年、郭沫若等と創造社を結成し、22年に帰国。27年の国共分裂後、一時は反蔣介石の中国国民党臨時行動委員会に参加するが、後脱退。39年、香港から上海に戻り、興亜建国運動に参加。汪政権では文物保管委員会地質部主任を務める。44年、上海藝術大学文学系主任となる。

楊之華	(1913-?) 広東人。筆名に楊樺・何穆爾・楊一鳴等。少年時代は香港で学び、上海の大学へ入学。1930年代、短編小説集『蓓蕾』を出版。中華日報社主筆を務め、副刊を編輯。44年『文藝評論』、45年『浮浪絵』を出版。
朽木	「中華副刊」では主に翻訳を担当。ハンガリー、ロシア文学の翻訳を手掛けた。
柳存仁 (柳雨生)	(1917-2009) 広東広州人。北京大学に学び、1937年上海で大学教員になる。40年、香港で香港府文化検査官に就任。42年上海に戻り、汪政権宣伝部編審、新国民運動促進委員会秘書を務め、中華日報社で主筆を担当した。43年、『風雨談』を創刊し、44年、太平書局で副經理となる。戦後は香港に移り、イギリスに留学し、後オーストラリアに移住しオーストラリア国立大学教授となった。
楊靜齋	江蘇蘇州出身。1937年、商務印書館より『唐寅年譜』を出版。
錢海一	中華日報社刊行の『中華月報』、『中華週報』に寄稿。雑誌『大衆』にも文章を寄せた。
蕭雯	主に詩・散文を寄稿した。『詩領土』同人。
陳烟帆	浙江寧波人。画家。1944年に上海人間出版社より散文集『駅站』を出版。『上海藝術月刊』『文友』を始め、多くの雑誌に寄稿した。
余拯	広東人。中華日報社で編撰を務めた。国民党員で、『風雨談』『文協』を始め、多くの雑誌に寄稿した。
雷振源 (真原)	広東人。日本に留学。中華日報社社長室参事を務めた。『風雨談』『中華月報』に日本人作家に関する文章を寄せた。
迅俟	不明。
伍雋子	散文作品を『新東方雑誌』、『作家』(南京)に寄稿した。
包公毅 (鈞影)	(1876-1973) 江蘇呉县人。天笑を号とし、筆名に鈞影・愛嬌・曼妙等。1906年に上海に定住し、『小説時報』、『婦女時報』などを編輯、小説を執筆し、通俗小説の大家と称された。
陶克德	(1908-1983) 浙江紹興人。筆名に亢德・徒然・哲庵・室暗等。1930年代、上海で『論語』等の編輯を担当した。38年に香港に渡る。41年に上海に戻り、翌年に中華日報社に入社、主筆を担当した。1940年代には、雑誌『古今』、『風雨談』等の刊行にも関わる。太平印刷出版公司内の太平書局で総經理を務めた。
沈志堅	浙江烏鎮人。1921年に茅盾の誘いで上海商務印書館編訳所に入り、『兒童世界』を編輯。続いて、新中国書局の『兒童科学雑誌』『少年科学雑誌』を編輯した。36年に長沙に、翌年には香港に移動した。

錢理群ら編『中国淪陥区文学大系・史料卷』(広西教育出版社、2000年)、紀弦『紀弦回憶録・第一部』(聯合文学出版社、2001年)、楊之華編『文壇史料』(中華日報社、1944年)などをもとに筆者作成。

pansion of the commercial activities of the *yahang* in keeping pace with the transformation of the commercial structure occurring during the last years of the Ming Dynasty.

From his examination, the author concludes that in the *qianshang* (僉商; compulsory business for merchants) form of the *maiban* corvee, the commercial guilds in charge of remittance merely paid the cost of the corvee, while the *yahang* were responsible for collecting the actual materiel and determining its value. Through the reforms implemented during the Chongzhen 崇禎 Era (1628–44), in addition to becoming nominally responsible for *maiban*, the *yahang* also took over the provision of funds for the corvee in place of the guilds. The background to such a development probably lay in the fact that as the expansion of *maiban* operations stimulated commerce in general, the involvement of the *yahang* in those operations helped them further develop commercial organization and gain more economic power and influence. The assumption of responsibility for *maiban* and operations for collecting the necessary materiel by the *yahang* of Beijing indicates their institutional and economic development compared to their counterparts in other regions of northern China, who remained mere middlemen in designated marketplaces.

Literary Activities in Shanghai under Japanese Occupation: An Analysis of the “Zhonghua Fukan” Feature in *Zhonghua Ribao*, 1942–1945

YAMAGUCHI Sanae

This article examines a literary column (“Zhonghua Fukan” 中華副刊), featured in the Wang Jingwei regime’s official newspaper, *Zhonghua Ribao* 中華日報, in an attempt to discover the kinds of literary activity conducted by intellectuals involved with that regime, as well as to provide an overall picture of the Shanghai literary scene under Japanese occupation.

Although a great deal of research already exists on the subject utilizing the literary periodicals of the time, special features in newspapers dealing with topics of literature and everyday life, which also provided a stage for the development of versatile literary activities, have been left virtually unstudied. In an attempt to fill this gap, the author of the present article focuses on how lit-

erary activities were covered in newspaper columns, particularly “Zhonghua Fukan,” heretofore not taken up in the literary research, but rather generally viewed merely as a platform for the promotion of Wang’s Peace Movement.

Moreover, the fact that the column appeared in the Wang regime’s official newspaper is another reason why it has not received the attention it deserves from scholars of modern Chinese history, a choice stemming from a superficial understanding of the feature’s character. To the contrary, by looking at “Zhonghua Fukan’s” more distinctive pieces and analyzing their literary direction and character, the author attempts to show how intellectuals close to Wang’s regime carved a niche for themselves within the Shanghai literary scene, as well as to depict the overall nature of the newspaper, which those same intellectuals edited and published, and its literary column, in particular.